

## 1 研究主題の設定理由

研究主題 「生徒が生き生きと書く表現活動（書き換え）に取り組む単元学習の創造」  
～「いかに教え込むか」の授業から学び合いの授業を目指して～

### (1) 今日の教育的課題から

- ・近年、国際的な学力調査の結果などから、各国と比べ、学力低下が懸念されるようになった。特に、OECDの学力調査において、自由記述問題の日本人の無答率の高さが課題として取り上げられた。
- ・また、同調査において、問題を解釈する力や自分の考えを表現する力に課題があり、思考力・表現力が不十分であると指摘された。

### (2) 学習指導要領から

- ・変化の著しいこれからの社会を生きていくためには、限定された仲間以外の他者との伝え合う力をつけていくことが重要である。
- ・相手や目的を明確にした学習の場を設定し、生徒たちの豊かな言語生活を育てていくことが求められている。

### (3) 生徒の実態から

- ・学力診断テスト、全国学力・学習状況調査の結果を見ると、記述式や自分の意見を述べる問題について無答が多い。
- ・仲間内で小さな紙片に書いた手紙を始終回したり、携帯電話のメール交換を延々と続けることは苦ではないが、「身近な仲間以外の人に対して自分の考えを述べたり、書く」となると、途端に話さなくなり、書かなくなる。
- ・普段の授業等の様子からは、適切な言葉を用いながら表現したり、登場人物の心情や作者の言いたいことを読み取ったりする力が劣っていることがわかった。

以上のことから、「いかに教え込むか」の授業から脱却を図り、学び合いの授業を目指していくことで、生き生きと書く表現活動に取り組みせ、書く喜びを実感させたいと考えた。

## 2 研究の目標

「いかに教えるか」の授業から学び合いの授業を目指していくことで、生徒が生き生きと書く表現活動（書き換え）に取り組むことができる単元学習の在り方を探究する。

## 3 研究の仮説

- (1) 作品の交流の時間を設けることで、学び合いの活動の中で、生徒たちはお互いの表現力を高め合うことができるであろう。
- (2) 書くことの楽しさを味わわせる単元学習を構想することで、自分の思いや考えを生き生きと表現することができるであろう。

## 4 研究の内容

### (1) 研究主題、サブテーマのとらえ方

#### ① 生き生きと書く表現活動とは

課題意識や目的意識を明確にすることはもちろんのこと、以下に示す仕掛けも大切であると考えた。

#### 「生き生きと取り組む」ための

仕掛けその1 授業の「見通し」を最初に持つ。授業の流れを板書する。

仕掛けその2 机間指導で課題に沿った活動をしているか確認する。そこでの「声かけ」「軌道修正」を大切にする。

仕掛けその3 授業の最後に振り返る。振り返りカードを有効に利用することで、次時の授

業につなげる。

仕掛けその4 授業のまとめは自分で行う。自分の言葉で表現する。

仕掛けその5 授業形態を工夫する。グループ学習を多用することで、「学び合い」の素地を作る。

仕掛けその6 評価は生徒にわかるように。どのくらいがんばれば、良い成績になるのか、その「目安」をはっきりさせる。

「生き生き取り組む」生徒のとらえについては、生徒の情意面の評価は難しいことである。また教師の主観が大きく左右してしまうことがある。単なる表情や態度だけで評価することはできない。そのため、本研究では、生徒の振り返りカードでの振り返りやアンケート調査を参考にすることとした。

## ② 書き換え学習とは

書き換えとは、リライト、翻作とも呼ばれている。首藤久義千葉大学教授は、この学習について次のように述べている。

翻作法では、翻作すること自体が表現の学習になるが、翻作するために原作を繰り返し読むうちに内容理解がさらに深まったり、確かなものになったりする。そして、原作の内容や形式になじみが深まる。表現された作品の内容や形式になじみが深まることは、表現されたものを読んで理解したり、自分で表現したりする際に活用される素養が豊かになるということである。

言語活動の4領域（話す・聞く・書く・読む）という面から見ると、翻作活動には、言語を通して理解する活動（読む・聞く）と、言語を通して表現する活動（書く・話す）との両方が含まれている。「なすことによって学ぶ learning by doing」原理から言うと、翻作活動に参加することによって、表現と理解の両方の学習がなされることになる。つまり、翻作法とは、表現と理解の総合的学習法である。（中略）

翻作の場では、表現のために理解がなされ、理解が表現に生かされる。翻作は十分に読み解いた後で、初めて始まるというものではない。翻作をめざして原作を読み込むということがあり得るし、翻作するという意識がまずあって、そのために使う原作を探すということもできる。翻作法による授業では、従来の読解授業と違って、解釈のために作品を読まされるのではなく、表現のために作品を利用するという、より能動的な態度を引き出すことができる。翻作の授業で子どもが生き生きと活動するようになるのは、そのためでもある。翻作法の見逃せない利点の一つである。

よく視写と間違えられやすいが、視写は文のまとまりを把握した上で写していくので、表現力や語彙力がついていくが、書き換えはそれプラス読解力がついていくと考えられる。従来の教師主導の読解授業ではなく、生徒が主体となった授業展開が可能なので、意欲的な活動が期待できる。まさに、この書き換えという手法を使って、本校生徒の弱点である表現力の克服に努めていきたい。

書き換えを用いた単元構想については、部員会で話し合ってきた。以下に、リライトを用いた単元構想のいくつかを例示する。

ジャンル		書き換えの進め方
教科書	物語	<ul style="list-style-type: none"><li>・会話文が足らなければ、会話文をどんどん増やしたり、付け加えたりしていく。</li><li>・難解な言葉があれば、辞書を引いて意味を調べながら容易な言葉に変えていく。</li><li>・長い文章は短い文章にしたり、短い文章は長い文章に変えていく。</li><li>・類語辞典を使って、違う言葉に置き換えてみる。</li><li>・登場人物の会話文の言い方（口調）を少し変えてみる。（おじいさん</li></ul>

教材		っぽい言い方にしたり，やさしい言い方にしたり・・・) ・擬音語の部分を増やしたり，変えたりしていく。
	説明文	・箇条書きにする。 ・インタビュー形式でまとめる。
唱歌・童謡 音楽		・唱歌・童謡を物語風にアレンジする。 ・音楽を聴いて物語にしていく。
劇 シナリオ		・物語を脚本のように仕立てていく。 ・「カペリート」(NHK)にセリフを吹き込んでいく。
古典		・漢詩を日本の詩のように変身させていく。
その他		・テキストのダイジェストを書く。 ・登場人物をもとに想像を膨らませて，物語や小説の続きを書く。 ・視点を転換する。(三人称から一人称へ，主人公(中心人物)そのものを変えてしまう等)

### ③ 単元学習とは

単元学習について，日本国語教育学会理事の安居總子は，「学習者の興味・関心・必要に根ざす話題をめぐって組織される一まとまりの価値ある活動であり，それによって言葉の力，学ぶ力，生きる力を適正に育て得るもの」と述べている。教科書は数多くの教材の中の一つであるにとらえ，確定した絶対的な教材としてはいない。つまり，子どもやクラスの実態に合わせ，学習活動を構成し，展開していくことである。

教師側で単元構成するにあたり，以下に示すようなことを常に意識していかななくてはならない。子どもの実態をつぶさにとらえながら，

- ・相手意識・目的意識をはっきりさせているか。
- ・どんな言語活動ができるか。
- ・学習材(教科書を含め，広く学習者の前に提供できるものすべて)の準備は可能か。
- ・学習環境設定はこれでよいか。

### ④ 「いかに教え込むか」の授業からの脱却

国語部員会等で常に共通理解していることは，

- ・教師のしゃべる時間は極力減らす。課題の説明や指示は簡潔明瞭に。
- ・生徒の考える時間(生徒主体で活動する時間)を十分に確保する。

### ⑤ 「学び合い」の授業への転換

計画的にグループ学習でやっていくことを確認している。そこで，生徒たちは「学び合い」，「高め合い」，「認め合い」が体験できるような活動にしていきたいと考えている。一人では学び合えない学習課題を，4人1組で協力しながら解決していく。低い学力の生徒の疑問をグループ内で解消していくことで，すべての生徒の学ぶ意欲を向上したいと考えたからである。机の配置やグループの役割分担，課題の進め方にはまだまだ検討の余地があり，その方法を模索中である。

「学び合い」の一環として，作品を交流する時間を設けている。同学年の友だちや異学年の下級生・上級生に，自分の作った作品を読んでもらったり，聞いてもらったりすることはとても重要なことだと考えるからである。そうすることで，「なかま理解」の面にとどまらず，会話文の効果，文章の組み立て等，多様な場面での表現について学ぶ上で良い効果が見られた。

### ⑥ 研究の構想

表現力は，当然ながら読解力や語彙力などと並行した形で，その力を養っていかなければいけない。単独でその力を付けていくことは不可能なので，以下の三つの視点も重視し

ながら指導を行った。

(関心意欲を高める指導) 国語部員会を充実させることで

- ・年間指導計画の見直しを行う。
- ・指導案の見直し、評価の工夫を行った。

(読解力を高める指導)

- ・朝読書を全学年全学級実施することにより、生徒に「読書習慣」を身につけさせた。
- ・教室や図書室の読書環境を整えた。
- ・一年間で30冊以上本が読破できる生徒を増やすための取り組みを進めている。

(語彙力を高める指導)

- ・辞書を机の傍らに置き、わからない言葉が出てきたらすぐに引かせるようにした。
- ・授業の導入部分で、「ことば遊び」を実施した。
- ・校内漢字力テストを学期に1回実施し、漢字小テストを随時行った。

(表現力を高める指導)

- ・視写や暗唱を家庭学習や授業に取り入れた。
- ・朝の会等で、スピーチを行った。

これらの指導の中で、特に強調しておきたいのが、「辞書の活用」である。授業のあらゆる場面で辞書を活用した。国語辞典や漢字辞典のみならず、類語辞典も積極的に活用し、一つの言葉がいろいろな言葉に置き換えられることを学び、語彙の拡充にも努めていった。朝読書で「辞書読み」を取り入れた学年もあった。調べた言葉の意味を国語のノートにメモしていくことで、いろいろなことばを知ることができた。その結果、作文などで表現力が豊かになっていった。

## 5 研究の実際

### (1) 仮説(1)について

各学年で「作品の交流」の仕方をいろいろと工夫してみました。

- |   |
|---|
| <p><b>1年生：</b> みんなの前で発表することで、切磋琢磨し合います。</p> <p><b>2年生：</b> グループ内で発表し合い、表現力を高め合います。</p> <p><b>3年生：</b> 隣の席の生徒と作品を交換し、「こうするともっと良くなる」という視点から、アドバイスし合い、ノートにまとめ直します。</p> |
|---|

授業中も「作品の交流」時間を適宜設け、作品完成に向けた「見通し」を持たせるようにした。また、良い表現は真似をさせ、真似ることで表現力の向上を目指した。

### (2) 仮説(2)について(国語部の取り組み・共通理解を踏まえた個人の実践(指導案を含む))

- ① 第3学年「広告・宣伝文を作ろう」における実践
- ② 第2学年「ハインの紹介文とフォトストーリー(なりきり版)をつくろう!～小さな労働者～」における実践
- ③ 第2学年「主体的な読みを深めるためにディベート用の発表原稿を作ろう～走れメロス～」における実践

今まで実施した単元学習とこれから実施しようとして構想している単元学習を、以下に示しておく。

#### 1年生

##### 【実施した単元学習】

- ・「さんちき」親方や武士の視点で書き換える。続き話を書く。
- ・「碑」で学習したことを新聞形式にまとめる。
- ・「分かりやすく書こう」新聞記事を5W1Hでとらえて、書き換える。

【実施しようとして構想している単元学習】

- ・「少年の日の思い出」 エーミールから見た「わたし」の視点で書き換える。
- ・「はちどりの不思議」 説明文をパンフレット風書き換える。

2年生

【実施した単元学習】

- ・「草に寝て・・・」 詩から物語文に書き換える。
- ・「神奈川沖浪裏」 作者の視点から見た「富嶽三十六景」を自己流鑑賞文に書き換える。

【実施しようとして構想している単元学習】

- ・「走れメロス」 ジャンルを変えて書き換える。(物語→インタビュー、登場人物の気持ち→短歌や俳句など)
- ・「カペリート (無声アニメ)」 セリフを吹き込んで有声アニメに書き換える。

3年生

【実施した単元学習】

- ・「永久欠番」 作者の中島みゆきさんに手紙を書く。
- ・「メディアを学ぶ」「テレビ映像の本質」 テレビや他のメディアとの接し方について自分の考えを書く。
- ・「広告・宣伝文を作ろう」 CDジャケット作りを通して、歌の魅力が効果的に伝わるような表現を工夫して書く。

【実施しようとして構想している単元学習】

- ・「卒業ホームラン」「ごはん」「故郷」 登場人物に宛てた手紙を書く。
- ・「テクノロジーとの付き合い方」「テクノロジーと人間らしさ」 二つの文章を読み比べ、自分の考え・内容について、新聞形式でまとめる。

6 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

① 仮説(1)について

ア 生徒たちに「書きグセ」がついてきた。書くことに抵抗がなくなってきただけでなく、表現力に「深み」が出てきた。

イ 書くことにおける継続的指導により、課題設定→構成→記述→推敲→交流という活動の流れが生徒にも定着してきた。

② 仮説(2)について

ア 国語に限らず、他教科の表現活動において、どの子も意欲的に楽しみながら活動できるようになった。

イ 推敲、作品交流等、生徒の学び合いの場を多く設けることにより、学習意欲の高まりが見られた。

(2) 今後の課題

① 本研究を継続していく上で、「生徒たちに最終的にどんな力をつけていきたいのか。」といった目的の再確認をしながら進めていきたい。

② 三年間を見通した授業づくりや単元構想をしていくことで、評価を含めた年間指導計画の見直しをしていきたい。

③ 表現することに苦手としている生徒には、個人差への対応について、得意としている生徒には、表現の質の向上についてが、それぞれ課題として挙げられる。